

全校のみなさん、おはようございます。

六月に入りました。もうすぐ期末考査があり、その先には西高祭も待ち構えています。

今年度の西高祭のテーマは「キャンバス〜私たちの色を重ねよう〜」です。

「白にも二百色ある」とは、ある有名人の言葉ですが、同じように見えても、ひとりとして同じ色のないのが私たちという存在です。

仏教では、「色（いろ）」を「色（しき）」と読みます。古いインドの仏教の中では、「色（しき）」は「物質的存在」のことを指し、基本的には見た目や容姿のことを指す言葉で、他に「色彩（カラー）」という意味もあります。

『阿弥陀経（あみだきょう）』という経典では、「浄土」の世界に咲く花について、次のように表現されています。

青色青光（しょうしきしやうこう）

黄色黄光（おうしきおうこう）

赤色赤光（しゃくしきしゃつこう）

白色白光（びやくしきびやくこう）

「青い色の花は青い光を放ち、黄色い花は黄色の光を放ち：」と、それぞれの花がそれぞれの色で、ありのままの光を放ち、それでいて争うことなく調和が取れている、それが「浄土」という世界なのだ、と教えています。

自分の色で光り輝けること、これが人間にとっての本当の満足や喜びであることを仏教では教えます。しかし、現実の私たちはどうでしょうか。誰もがうらやましがるような色になりたいと思ってみたり、周りの目線を気にして自分の色を変えようとしたり、人を自分の都合の良いような色に塗りつぶしてしまったりしているのではないのでしょうか。自分が自分でいられなくなり、争ったり苦しんだりしているようです。

そのような私たちに、他と比べる必要や、自分の色を変える必要もなく、それぞれの色をお互いに認め合える安心できる世界のあることを仏教では教えているのです。